

## 「抓壮丁」にみる四川作家の特色

中 裕 史

### はじめに

中国の長い歴史において戦乱は絶えることがなかった。王朝の交代期はもちろん、全盛期にあっても、その支配する地域において内部抗争があり、あるいは支配地域周辺の外部勢力との間で領土をめぐる戦いが繰り返されてきた。

絶えず繰り返されるこうした戦乱が、人びとの生命や財産、静穏な暮らしを脅かしたことはいうまでもない。そうした脅威のひとつに徴兵がある。徴兵は一家から夫や息子を奪い去る。夫や息子は二度と戻らないかもしれない。出征する本人はもちろんのこと、残される妻や両親も夫や息子の身を案じ、大黒柱を失った一家の生計を案じて、いずれもそれ以前の生活とは一変した苦難の日々を送ることになる。まして、それが為政者の果てしない野望や一時の気まぐれに端を発する戦争のための徴兵であるなら、何をかいわんやである。

文学は、こうした徴兵に起因する人びとの苦しみをどのように捉えてきたのであろうか。

杜甫は「兵車行」<sup>1)</sup>で出征兵士と詩人との問答形式を用いて、對外拡張を図って徴兵を繰り返す為政者を批判

している。

道旁過者問行人

道旁の過ぐる者 行人に問う

行人但云點行頻

行人は但云う 点行頻りなりと

行人とは行軍している兵士のことである。道旁の過ぐる者、実は杜甫の問いかけに対して、兵士は徴兵がしょっちゅうあるのですと答える。兵士は続けて、同僚には十五歳で徴兵されて四十歳になってもなお屯田兵として辺境の防備にあたっている者があると言う。

邊亭流血成海水

辺亭の流血 海水を成すも

武皇開邊意未已

武皇 辺を開く 意は未だ已まず

君不聞漢家山東二百州

君聞かずや 漢家山東二百州

千村萬落生荊杞

千村万落 荊杞を生ずと

辺境でたくさんの血が流されても、武帝の辺境征伐の意思は変わりません。漢王朝の領土の東部二百州では、多くの村落で畑仕事をする男手がなくなり、雑草がはびこっている始末です。兵士はこのように語る。

皇帝の攘夷政策のために、辺境では働き盛りの男たちが犠牲になり、国内では田畑が放置されている状況を、杜甫は兵士の口を借りて痛烈に批判している。兵士には武皇すなわち漢の武帝と言わせているが、実は詩が作られた当時の皇帝である玄宗を暗に指していることはいままでもない。

このように、杜甫は、間接的、婉曲的にはあるが、時の皇帝である玄宗の對外拡張政策を批判し、兵士として徴発される人民の難儀をうたった。

徴兵に関わるこうした行政批判と人民への同情を継承したのが白居易である。白居易は新楽府「新豊の臂を折りし翁」でつぎのように詠じている。

無何天寶大徴兵

何ばくも無く 天寶 大いに兵を徴し

戸有三丁點一丁

戸に三丁有らば一丁を点す

點得驅將何處去

点じ得て驅り將て何れの処にか去る

五月萬里雲南行

五月 万里 雲南に行く

平穩であった開元の時代が終わり、年号が天寶に改まると、唐朝と雲南の南詔国との間で戦争がおこった。長安に近い新豊の地では、働き盛りの男子が三人いる家から一人を驅り立てて、遙か遠い雲南まで従軍させようとした。

村南村北哭聲哀

村南村北哭声哀し

兒別爺嬢夫別妻

兒は爺嬢に別れ 夫は妻に別る

皆云前後征蠻者

皆な云う 前後 蛮を征する者

千萬人行無一迴

千万人行きて一も廻るなしと

村のあちこちでは兵士にとられた家族との別れを悲しむ姿がみられた。これまで南蛮征伐に出た者はおおぜいあったが戻った者は誰一人いなかったと皆が言いあって、息子や夫との今生の別れに泣き叫んで悲しみをあらわにするのである。

新樂府の題になっている「臂を折りし翁」は、徴された後、人知れず深夜に自らの右臂を大きな石でたたき折って従軍を免れた。そうして六十年、臂の痛みや片腕しか使えない不自由に耐えながら、生命を永らえてきたのであった。

白居易は、自ら不具者となった老人の人生を語ることによって、徴兵が人民にもたらした災厄の大きさを訴えている。もっとも、白居易の筆鋒は、「臂を折りし翁」を通して、為政者に向けられている。

又不聞天寶宰相楊國忠 又た聞かずや 天寶の宰相 楊國忠

欲求恩幸立邊功 恩幸を求めて 辺功を立てんと欲するも

邊功未立生人怨 辺功未だ立たずして人の怨みを生ぜしを

請問新豐折臂翁 請う 問え 新豐の臂を折りし翁に

天寶年間の宰相であった楊國忠は、皇帝の恩寵を得んがために雲南征討の軍をおこしたが、功績を立てることとはかなわず、人民の怨嗟を生じただけであった。白居易は自注に、「前後二十余万の衆を發し、去りて返る者無し。又た人を捉え枷に連ねて役に赴かしむ。天下怨哭して、人聊かも生きず」と述べて、人民に枷をはめて死地に追いやった楊國忠の強制的な徴兵が、天下を怨嗟や哭泣で満たし、人民の平穩な生活を破壊したことを痛烈に批判している。

明朝以降は徴兵制をやめて募兵制に改めたが、清末民初の混乱期に、各地の実力者が私兵を養い、軍閥として擡頭しはじめると、募兵では満たすことができない必要数を確保する有効な手段として、各戸に兵役を課することが再び行われるようになった。

しかし、さまざまな原因によって、徴兵によっても兵士を十分に補給することができない状況が発生することもあり、軍閥は、そうした場合には「抓壮丁」を行った。「抓壮丁」とは、兵士や軍夫として人民を強制的に徴発することである。

中華民国期における「抓壮丁」は、四川作家の作品にしばしば登場する。四川作家はなぜ「抓壮丁」を材料にして作品を書いたのか、また、それぞれの作家の特色が「抓壮丁」の叙述にどのように反映されているのか。小論では、こうした点を考察することによって、「抓壮丁」の実情を明らかにするとともに、「抓壮丁」の叙述にあらわれた四川作家の個性を浮き彫りにすることを試みる。

## 一 四川における「抓壮丁」

中華民国の時代になると、中国の各地に大小の軍閥が割拠して互いにしのぎを削った。その中で大きな勢力を誇ったのは、北洋軍閥と雲南や広西、広東などの南方軍閥であったが、それらの影響力が及びにくい地域に位置する四川では、各地に小さな軍閥が成立して、防区と呼ばれた根拠地を擁して兵を養い、抗争を繰り返していた。

蒋介石の北伐が順調に進展すると、四川の各軍閥は国民革命軍の旗印を立てることになり、紅軍との戦いや抗日戦争に投入された。このように、二十世紀の前半は、四川にとって息をつく暇もない戦闘の連続であった。

こうした情勢の中で、次第に消耗していく兵力の補充が喫緊の課題であったことはいうまでもない。

李劫人や艾蕪、沙汀といった四川作家の作品に、「抓壮丁」がさまざまな形で登場する背景には、このような状況がある。

「抓壮丁」は、実際にはどのようなに行われたのであろうか。改革開放後まもなく成都で刊行された、歴史や文化にまつわる文章を掲載した『龍門陣』誌にみえる熊子俊「兵隊に引っ張られるの記」<sup>3)</sup>の記述によって、その一面を窺いみてみよう。

熊子俊が「抓壮丁」に遭遇したのは、一九四六年冬のことである。当時は、蒋介石が共産党の解放区に対して全面的な攻勢をかけていて、次つぎに部隊を前線に投入していた。

眉山に駐留していた新編十七師団劉樹成の部隊も、この時に命を奉じて前線に増派されることになったのだが、誰もが知っているように、兵士を水増しして軍費を余分に受給していたために、国民党部隊の編成はずっと定員を満たしていなかった。けれども、いま前線に移動して「共産」を攻めようというのに、名簿の上だけの紙の兵士や紙の軍馬を砲弾の灰にすれば済むというわけにもいくまい。それで、行軍の道すがら兵士を拉致しなければならなくなった。しかし、庶民はみな「兵を見ること虎を見るが如し」であって、軍隊がこちらの山にいる時には、自分とはとくにあちらの山に隠れているというという具合で、ならず者の兵士が通り過ぎるところには、青壮年の男子は誰一人いなかった。<sup>4)</sup>

抗日戦争に勝利した後、一息つく暇もなく、内戦に突入した蒋介石であったが、その指揮下にあった四川の部隊では、兵士の定員に応じた軍費を受給していたが、実際の兵員数は定員を下回ることが常態化しており、

不正に受給した差額は指揮官らの懐に入っていた。そのために、戦場に赴く際には、道すがら兵士を補充して数合わせを行うとともに、戦闘に欠かせない人手を増やしておく必要があった。

当時、仁寿県の高級中学で学んでいた熊子俊は、自宅から十五里離れた中学に通うため、毎日夜が明ける前に家を出て、夜暗くなってようやく家に戻った。その日もまだ暗いうちに家を出て中学に向かっていたが、夜が明けてきた頃に、劉樹成の部隊に出くわすと、一人の兵士に肩を掴まれて「行こうぜ」と言われた。「中学生なんです」と言っても、まったく取り合ってもらえず、ゲートルをきつくまかれ背囊を背負わされて隊列に加えられた。

しかし、幸運なことに、次の日の朝、解放してもらうことができた。熊子俊が拉致されたことを知った同級生がただちに袍哥に渡りをつけてくれて、その仲介によって解放されたのである。

「抓壮丁」は、このように、抗日戦争が終わった後もなお行われていた。「抓壮丁」が現代文学の中でどのように叙述されているのかをみるにあたって、まず、四川における壮丁徴発の状況がどのようなものであったのかを押さえておきたい。

万金裕は『抗戦八年徴兵および兵役における四川人民の貢献』<sup>⑤</sup>において、「八年の抗戦のあいだ、さまざまな方面で四川省は大きな貢献をはたした。中でも、前線が必要とされる大量の兵員の徴集、訓練および補充については、他の省を大きく上回っていた」<sup>⑥</sup>と述べている。

では、どのくらいの兵員が必要とされ、実際に徴集されたのであろうか。何応欽『八年抗戦の経過』<sup>⑦</sup>にみえる数字によると、一九三七年から一九四五年までの八年間に、全国に割り当てられた壮丁の人数は一千六百六十四万一千八百二名で、うち四川省への割り当ては最も多く、三百十九万三千八百七名であった。全体の十九パーセントにあたる大きな数字となっている。また、八年間の実際の徴発人数は、全国で

一千四百五十五百二十一名であるのに対して、四川省の徴発人数は、こちら最多の二百五十七万八千八百八十名となっていて、全体の十八パーセントを占めている。

割当人数、徴発人数ともに、二番目は河南省、三番目は湖南省となっているが、河南省への割り当ては二百二十一万四百七十三名、徴発は一百八十九万八千三百五十六名であり、四川省とは百万人近い差がある。四川省の数字が群を抜いて大きいことがみてとれる。

四川省における割当人数の充足の度合いは八十二パーセントである。そもそも戦争という困難な状況下にあって、しかもおそらくは幾らか多い目に設定されていたであろう割当人数を充足することは不可能であると思われるが、兵士をかき集める必要があったことは事実であり、そのために「抓壮丁」のごとき強引な手段がとられたことは想像に難くない。

「抓壮丁」はこうした状況の中で、四川の各地において強行された。四川作家の作品に「抓壮丁」が登場するのは、このような背景があるのである。

呉雪らの集団創作による一九四三年の三幕劇『抓壮丁』<sup>⑧</sup>は、抗日戦争期の四川の農村でおきた「抓壮丁」をめぐる混乱を描いている。

小作農の姜国富は、孫が昨年「抓壮丁」に遭って逃げようとして殺され、今年は一人しかいない息子が招集されることになった。息子が軍隊にとられないよう、姜国富は懸命に金を工面して、地主である李老栓の家を訪ねて、村における徴兵の責任者である保長の王大爺に口をきいてほしいと懇願する。李老栓は口先では請け合うが、実際には自分の次男の兵役を免れるために、その金を王保長に渡して身代わりを見つけてもらおうとする。

姜国富の息子は連行されるが、途中で逃走して匪賊に身を投じる。そのことを知らない姜国富は、王保長に



息子を返してほしいと頼むが、地面に突き飛ばされ、農民連行の実行役である団丁に暴行されて命を失う。

李老栓の長男は某連隊で副官をつとめているのだが、実家に戻ってきたこの長男と、王保長、そして農民連行の指揮をとる盧隊長の三人が、われわれが腹を決めてかかれれば壮丁がつかまらないことがあるものかと声を揃えて言う場面で、この劇の幕は下りる。

『抓壮丁』は、善良な老農夫から金をむしり取り、彼の一人息子や孫を兵士として徴発する地主や保長の非道と、金銭や女性をめぐる争う地主父子や保長の醜悪を前面に押し出した作品である。

このようにみえてくると、『抓壮丁』の目的は一つであり、兵員を補充することであるが、その方法は二つに分かれることがわかる。方法の一は、通りがかりの人間の拉致であり、もう一つは徴兵の延長線上にあるもので、本来応召するはずの人間の身代わりを連行することである。

いずれにしても、『抓壮丁』は、農家から働き手を奪い去って生計の道を絶ち、一家を悲嘆と困苦の淵に突き落とす非道な行為であることはいうまでもない。

先に挙げた杜甫や白居易は、徴兵の憂き目にあった農民に同情し、徴兵令を発した皇帝や宰相を非難したが、二十世紀の四川作家は、『抓壮丁』をどのように材料として用いたのか、どのような立場から『抓壮丁』を描いたのか、以下に検討してみたい。

## 二 李劫人による「抓壮丁」の叙述

李劫人は、一九三二年冬の成都における軍閥の市街戦の模様を記した『危城追憶』<sup>9</sup>と題する文章の中で、自身が目撃した「抓兵」の有り様を詳細に述べている。

まずは軍事専門家が登場して、わたしすなわち李劫人に対して、「皆さん、ご存知ですか」の一言を何度も挟みながら、徴兵制と募兵制の歴史について語り、さらに「抓兵」の起源に関して、楊惠公すなわち楊森<sup>⑩</sup>がはじめた方法ではないかと自説を開陳する。そして終わりに次のように述べる。

「しかし、皆さんご存知ですか。昔は、人を引っ張って兵士にするのは、ただ人を引っ張って兵士にするためだけのことでしたので、引っ張るのにも範囲がまだありました。身体の頑丈な者、肉体労働をしている者、街でぶらぶらしていて仕事のない者、身なりの整わない者です。後になって、日が経つと弊害が生じるというわけで、人を引っ張るのは兵士にするためでなく、ただ金品を奪い取るためになりました。だからあなたさまがご覧になったようなことが起きたのです。……」

続けて、李劫人が自ら目撃した「抓兵」の出来事を語る。まず、田頌堯の第二十九軍が劉文輝の第二十四軍との成都を舞台にした市街戦に敗れ、鄧錫侯の調停を得て、安全に北に向けて撤退し、成都の街に平穏が戻ったことを述べる。<sup>⑪</sup>

そうなると、市街戦の期間は会えなかった親戚や知人を訪ねて行って、無事を喜び合うとともに、その間の出来事について語り合うことになるのだが、李劫人が訪ねた親戚の家で昼食をとむにするために、料理を買いにやらせた炊事係の使用人が戻ってくると、街で軍夫の拉致がはじまったと言う。

炊事係の使用人は部屋に入ってくるなり騒ぎ立てた。「二十四軍がまた軍夫を引っ張っています。誰かれかまわず、見たらすぐに引っ張っています！ 長順街はそのためにも人通りが絶えて、店もみな閉めています！」

わたしは慌てて尋ねた。「人力車はもうなくなったりはしないだろうか？」

「どこに車の影などあるのですか！ 引っ張るのはまず車引きからで、次に手ぶらの者ですが、今日のはひどいもので、食べ物を買う人やお店の使用人まで引っ張っています！」

親戚の一人は言った。「きつと東方面の戦局が緊迫して、二十四軍が救援に向かうことになったので、そんなふうにもやみに引っ張っているんだ。」<sup>(13)</sup>

これを聞いて、李劫人は、民国五年（一九一六年）にやはり自ら遭遇した、四川で最初の軍夫拉致事件を思い起こして、この事件について読者に語る。

四川に派遣されていた北洋軍閥の陳二庵すなわち陳宦は、四川軍の周駿が東方面から攻めてきたために、北に向かって逃げる羽目になり、<sup>(14)</sup> 軍夫を雇う暇もなく、街で手当たり次第に軍夫を拉致した。李劫人はこれが四川における軍夫拉致のはじまりだと言う。

繁華街である東大街を歩いていた李劫人の目前で、兵士が街を行く者を誰彼かまわず拉致していた。前を歩いていた一人と、後ろを歩いていた三人が無理やり引っ張られたが、幸運なことに李劫人だけは声をかけられなかった。

北洋兵がこうした行動を創りだしたので、それからは軍隊が進発することになると、軍夫の費用は中隊長の懐に入り、必要な軍夫は街じゅうで引っ張られ、至る所で引っ張られた。ただ、明文化されていない制約はそれでもあって、長衫を着た知識人は引っ張らず、輿や人力車に乗っている者も引っ張らず、天秤棒をかついだり売り荷を背負った者も引っ張らず、商店の中にいる者も引っ張らず、学生も引っ張らなかった。し

かも引っ張って行っても本当に軍夫をさせて、食い物も与え、目的地に着いたら必ず解放して、自分で何とかして家に帰るようにさせたのであった。

しかし、そうだとすると、わたしは軍夫拉致と聞くと、いつも不快な気持になるのだった。<sup>15</sup>

李劫人によれば、「抓兵」のはじまりは北洋軍による軍夫拉致すなわち「拉佚」であった。その後、四川の軍隊でも、行軍に必要な物資を運ぶ軍夫を雇うための費用を、指揮系統の末端にいる中隊長が着服して、それでも集めねばならない軍夫は拉致してきて食い物だけを与え、目的地まで物資を運ばせたのだった。ただ、当初は誰を連行するかについての不文律があつて、手当たり次第に拉致するということはなかった。

それが、次第になしくずしになって、拉致してきた者を軍夫でなく兵士にするようになり、また拉致の対象も拡がって行き、知識人であれ、学生であれ、商人であれ、誰彼かまわず連行するようになった。さらには、拉致を口実にして金品をせびる無法も行われるようになった。

前章でみた、通りすがりの中学生を拉致して兵士に仕立てる行為は抗日戦争後の内戦の時期のことであったが、こうした強引なやり方は、四川の軍閥によってもっと早い時期から行われていたことが、李劫人の記述によって明らかになっている。「抓壮丁」は抗日戦争時の現象であるとの説もあるが、<sup>16</sup>実際には、北伐が完成して四川の各軍隊が国民革命軍に編成される以前に、すでに「抓壮丁」は四川で行われていたのであった。

通りでは、連行される資格はないと自分で思っている老人たちが、あちこちで道端に立って、議論していた。「ますます話にならない！ 昔はまだ引っ張って行つて軍夫にして、ありったけの力を出させるだけで、帰って来られる者もあったが、今じゃ何と引っ張って行つて兵士にさせ、やつらと戦わせる。それも人を選

ばず、誰だろがみな引っ張る。逃げたら、逃亡だと文句をつけてどうかすると殺す。多少財産のあるやつは、破産するまで絞り上げる。これは何て世の中だ！……」

「抓兵」の文章は、右の老人たちの議論の後に、「抓兵」の現場に居合わせた李劫人が拉致されなかったのは、だぶだぶの古びた羊皮の上着のおかげだという軍事専門家の推測を置いて結ばれている。

以前の拉致は必要に迫られたやむをえないものであったが、今では手当たり次第に拉致して戦場に駆り出したり、逃げれば殺したり、財産があれば取り上げたりと、掟破りのでたらめなやり方になっていることを、老人たちは嘆いている。

このように、李劫人は、「抓兵」のはじまりを語り、自ら遭遇した「抓兵」の現場を語り、親戚や街の老人たちの口を借りて軍閥の無法を語っている。ひとつの事件について、その起源から説き起こし、なぜそれが起きたのか、どのような背景の下で起こったのかを読者に滔々と語る、独特の饒舌な叙述によって、「抓兵」の全容が明らかにされているのである。

この饒舌な叙述の中で、李劫人の筆鋒は一貫して軍閥の無法に向けられている。

『危城追憶』より十年ほど早く発表した短篇小説『運を失ってからの兵士』<sup>18</sup>では、主人に代わって市に豆を売りにでかけた小作農ふたりが、「拉伕」に遭ってまず一時雇いの軍夫にされ、次に正式な軍夫にされ、おしまいには兵員の不足を埋めるために兵士にされて銃火にさらされる様を描いている。

兵士になって改名させられた兩人は、軍隊生活に馴染んでいくにつれて農民らしさを失っていき、一般人を脅かしたり、強奪や強姦にも加わるようになって、本物の兵士になっていく。兩名が所属する大隊は、師団長と地域の自衛組織の長である国防との諍いがもとで起こった戦闘に派遣されて大敗し、兩名は大隊を離脱して

逃走するが、敗兵狩りの追手にあって追いつめられる。

この小説においても、李劫人は、師団長と団防との諍いを詳細に語っている。通常の税や課金に加えて新規に住民税を徴収しようとした師団長は、これを拒絶した団防にびんたをくらわせ、銃殺にしようとしたが、とりなしをする者が大勢あって、罰金を科した上で帰らせることとした。収まらない団防は一戦交えることを決意したのであった。

このように、李劫人は、拉致されたふたりの兵士を前面に置き、師団長と団防を背景に置いて、背景についても十分に説明をしながら語りを進めている。この小説で、李劫人が批判しているのは、次第に悪事に手を染めるふたりの兵士ではなく、師団長である。師団長は横暴であり、増収を図って地域に負担を押し付け、地域の有力者に対しても人を人とも思わない傲岸な態度を示す。

李劫人の筆鋒は常に為政者の非道に鋭く向けられているのである。

### 三 艾蕪による「抓壮丁」の叙述

艾蕪が一九四〇年に桂林で執筆した短篇小説『意外』<sup>19</sup>には、ふたりの小作農が「抓壮丁」に遭って拉致される場面が設けられている。

張と李は貧しい小作農で、農閑期には、張は、家の入口で虱をとっているか、山へ柴刈りに行くかであるが、李の方は、元手を借りて広東に下り、塩を売って儲けていた。張は李が何度も塩を売りに行って金を儲けて帰って来るのを見て、心が動き、自分も元手を借りて李とともに出かけることにした。ふたりは湖南から広東に至る寂しい山道を歩いた。

午後になった頃、道が分かれている所に辿りついた。そこには休息ができる涼亭があって、上にはガジュマルの樹が覆っていて、背後には泉がこんこんと流れ出ていた。道行く人は、みなここで涼をとり、両手で泉の水をすくって飲んだ。張と李は、もうすぐそこという時に、何人かが、涼亭の入り口に座っていて、みな上半身は裸で、手には銃をそれぞれ握っているのに気がついた。李が続けさまにだめだと叫ぶと、張は向きを変えて後ろに逃げ出した。しかし、銃を握った男たちの方が目ざとく、すぐに立ち上がると、大声で叫んだ。

「逃げるな、逃げたら撃つぞ！」<sup>(20)</sup>

軍夫を徴発して帰營する部隊が小休止しているところに姿を見せた兩人は、前日に逃げたふたりの軍夫の身代わりに拉致されたのだった。兩人は軍夫の列に加えられて山道を歩いた。

夜になると、荷を担わされた彼ら四人は一緒に休んだ。張は横になっても、何となく眠れなくて、小さな声で尋ねた。

「あの兵隊さんらはいつおれたちを放してくれる？」

洋風シャツを着た男は思わず失笑をもらした。つぎのあたった軍服を着た軍夫は彼に言った。

「あんたは安心しておれたちといないさい。あれこれ心配しなくていいから！」

李は心配そうに尋ねた。

「隊長さんは行かせてくれないのか？」

洋風シャツを着た男は責めるように言った。

「何て馬鹿なやつらだ！ この様子を見てわからないのか？ お前らに荷物をかつがせるだけじゃなく、鉄砲だって持たせるんだぞ！」

軍の様子をわかっている男たちの話から、解き放ってもらえる望みがないどころか、果ては兵士にされることを知った兩人は、がっかりしてため息をつく。洋風シャツの男から、金を出せば班長に話をつけてやる、昨日逃げたふたりも金の力で逃げられたと聞かされるが、金はないと答えて男の話に乗らなかった。

夜中になって、張は李をそっと揺り起して、小さな声で言った。

「おれは眠れない、ものすごく落ち着かないんだ！ 明日、おれは帰る。」

李は耳をすまして、傍で眠っているふたりの軍夫がいびきをかいているのを聞くと、それから張の方を向いて言った。

「やつらに金を渡したら、どうやって借金を返すんだ？」

張は深くため息をついた。李は続けて言い聞かせた。

「やめておけよ、村じゃお前を軍隊に差し出そうとしているじゃないか？」

張はすこし考えて言った。

「やつらは、一人息子は行かなくていいと言ったじゃないか？ おれたちはふたりとも一人息子なんだぞ！」

李は首をふって言った。

「信じられるものか。唐村長たちなら何だってやれないことはない！ 兵隊に行けと騒ぎ立てやがったら、いやだと言えるものか！ 今日と同じで、お上がお触れを出したんじゃないか。やつはお前をつかまえて行



かせるとなったら行かせるに決まってる！」

張は辛そうに目を閉じた。<sup>(22)</sup>

商売の元手を出して放してもらうことができて、村に帰れば、村長たちが一人息子は召集しないという決まりなど無視して、お上の割り当てを満たすために、兩人のような貧しく、卑しい農民を軍隊に差し出す。出口のない兩人は、そのままここに留まるより仕方がないのである。

点呼の際には名簿に載っている別人、すなわち逃走した軍夫の名を呼ばれたら返事をするよう命じられていた兩人であったが、街に着いた翌朝、点呼の時に、張は忘れていて返事をせずびんたを食らい、李は祖先の姓である李とは別の姓を名乗るのはいやだと抗弁して殴る蹴るの暴行を受けた。

ここに至って、兩人はようやく虎の子の金を出して、洋風シャツの男に渡して口を利いて逃がしてもらおうとするが、山の中ならともかく、街に入ってからでは遅すぎると言われてしまう。

艾蕪は、このように、主人公であるふたりの小作農に終始焦点を固定して、「抓壮丁」を描いている。拉致の原因となった軍夫の逃亡や逃亡の実情については、兵士や軍夫の口を借りて説明しているし、兩人に金を出すことをためらわせた村の事情については、兩人の対話によって明らかにしている。「抓壮丁」の背景にある事情の説明は、あくまでも兩人とその周りの人物の言動によっていて、語り手が直接に読者に語る方法を取っていない。

それゆえに、小説の重点は、軍閥に対する批判よりも、「抓壮丁」の被害者の描写におかれることになる。艾蕪は、このように、平凡で善良な農民に満腔の同情を注いで、その運命を訥々と語る作家なのだ。

『意外』と同時期に執筆した短篇小説『荒地地』<sup>(23)</sup>でも、地主の息子の身代わりになって徴集された農民とそ

の家族の極貧の暮らしぶりを描いている。語り手は、まず茅を屋根に載せた粗末な掘っ立て小屋の様子を、続いてその小屋に住む女性とふたりの子のみすばらしく不衛生な様子を語る。次に、落花生の菓子売る目の爛れた老人を登場させて、女性の夫が家族をおいていなくなった事情を語らせている。

女性の夫は、地主の次男の身代わりとなって応召したのであった。身代わりになるにあたって、地主は、身代わりのことを口外しないという約束で、一家が払えずにいた二年分の小作料を棒引きにした上に、五十元の現金までくれた。こうして、夫は喜んで出征していき、妻はぎりぎりのところでうにか子どもと生きているのであった。

この小説では、前半は語り手が女性と子どもの暮らしぶりについて語り、では夫はどうしたのかという疑問については、後半で老人が語るという体裁を採用している。小説の重点は、この作品でも終始小作農の一家の境遇におかれている。艾蕪は、地主のやり方を批判する書き方はせず、小作料すら払えないほどの貧乏ゆえに、夫は徴兵に応じ、残された妻は女手一つで子どもを食わせていくという、家族それぞれの苦境に対して、深い同情の眼差しをもって見つめているのである。

#### 四 沙汀による「抓壮丁」の叙述

これまで見てきたように、李劫人は、四川における軍閥混戦時期の「抓壮丁」を、艾蕪は、抗日戦争時期の「抓壮丁」を、それぞれの立場から叙述している。李劫人は、軍閥による路上での拉致を描き、艾蕪は、国民党の部隊によるやはり山道での拉致と徴兵名簿に基づく村長による徴発を描いている。

抗日戦争時期になると、各地の軍閥が国民政府の軍隊として再編成されて、戸籍に基づいた徴兵が行われる

ようになった。四川でも、一九三八年六月に軍管区司令部が成立し、六つの師管区において、各地から徴発されてきた壮丁を受け入れ、兵士としての訓練をして前線の部隊に送り出すようになった。<sup>(24)</sup>

各地において徴兵を管轄したのは地元政府であるが、その現場の業務に携わったのは行政機構末端の郷や保、甲の長であった。一九三八年十月に武漢と広州が陥落すると、四川は行政のみならず、軍事においても、抗日の重要な役割を担うことになった。さきに挙げた何応欽の数字によれば、徴発した壮丁の実数は、四川省が一九三九年に河南省を抜いて首位となり、一九四五年までずっと最多であり続けた。<sup>(25)</sup>

しかし、全国最多の壮丁を徴発する過程で、これまで李劫人や艾蕪の作品によって見てきたように、徴発する側が不正を行い、そのために人びとが苦しめられてきたことはやはり少なくなかったようである。冉綿恵は『民国時期四川の保甲制度と基層政治』の中で、郷鎮保甲長に対する懲戒処分に言及して、「兵役に関する不正」や「法令を無視した一人息子の強制連行」などをその理由として挙げている。<sup>(26)</sup> また、笹川裕史は、『糧食・兵士の戦時徴発と農村の社会変容——四川省の事例を中心に』の中で、違法な拉致の蔓延がもたらす弊害として、被害者の多くを占める行商人や運搬労働者の拉致によって地域間交易が停滞して糧食価格が高騰したこと、および、管轄外の壮丁拉致によって地域間対立が激化したことを指摘している。<sup>(27)</sup>

こうした「抓壮丁」に関わる不正を小説に盛り込んでいるのは沙汀である。沙汀には、艾蕪と同じく「抓壮丁」による農民の苦境を描く作品と、保長に焦点をあてて「抓壮丁」の内実を暴露する作品とがある。

まず、「抓壮丁」の被害者である農民を主人公にした一九四六年の短篇小説『煩惱』<sup>(28)</sup>をみてみよう。

父親が何日か前に彼に、内戦がはじまって、また兵士を徴発することになったが、もし本当に徴発するのなら、兵士にとられないよう郷長にあらためて頼んでおかないといけない、と言うのを聞いてから、彼は気

持ちが落ち着かないのを感じて、心が乱れた。<sup>(29)</sup>

劉久発は、兵士にとられることになったら逃げればよく、郷長に頭を下げに行く必要などないと思っているのだが、父親の言うことに正面から反対するわけにもいかず、徴兵されるかもしれないことと、そうなった時に自分の考えによって行動することができず、予め手を打っておこうという父親に従わねばならないことに悩んでいるのである。

この小説は、寢床の中で、結婚して三カ月になったばかりの妻と、ふたりで遠くへ働きに行こうとひそひそ話をする場面で結ばれている。郷長が頼みを聞き入れてくれる保証もなく、新婚の妻を残してひとり逃げることもできない中で、夫婦はふたりで苦勞をとにもする道を選ぼうとするのである。

このように、人民の苦境を静かに訴える作品を書く一方で、沙汀は、壮丁を徴発する側に焦点をあてた作品も書いていて、沙汀の本領はむしろこうした行政の側を批判する小説によりよく発揮されている。

一九四五年の短篇小説『身代わり』<sup>(30)</sup>では、「抓壮丁」をいわば現場で執行する役目をつとめる保長が主人公に設定されている。

彼には壮丁がなお一名足りていなかったが、この数字はまったくいたしたものとはいえなかった。彼の保で年齢があてはまる壮丁の数からいえば、一人多く徴発してもどうということではなかったからである。しかし、残念なことに手を下せるうってつけの人間は一人もいなかった。その男たちは、彼の親戚でなければ、親戚の親戚であり、中には彼よりもずっと地位の高い者とながりのある人間もあった。こうした避けて通れない人間関係は、まるで網のようであって、彼はすでにその中で何度もひっかかっていて、どうにも出口

を見つけられなかった。命令書を買うのはもちろんひとつのやり方で、簡単明瞭に、金納すればそれで足りた。ただ、金額が大きいのに加えて、現金でなければならぬので、割り当てをするのは容易ではなかった。往来する商人をとりあえず引っ張っておく手もあった。この保には陸路も水路も通じているので、このやり方はけっして難しくはなかった。しかし、陰暦二月のはじめから、荷をかつぐ商人たちの行き来はほとんどなくなっていた。<sup>(31)</sup>

緊急の徴兵命令が来ていて、郷長から一日で欠員を補充しろと怒鳴られた保長は、毎日顔を出す酒場にも茶館にも行かず、どうしたものかと弱り切っていた。人を出そうにも出せず、金を集めることもできず、役目を果たすあてもないまま家に戻った。妻とひとしきりやりあった後で、妻の母親が聞いてきた話を妻から聞いて、近ごろ哥老会を除名になった九子痒という男を連行することに決めて、人手を集める。武装も整って、同行者たちに九子痒を連行することを話すと、同行者の一人に、その男なら金を出して宴会を催し、哥老会に詫びをいれたのだと言われて、目当てを失い、妻に八つ当たりする。

しかし、別の同行者が木賃宿に客があったようだというので、急ぎょ木賃宿に向かうと、果たして塩商人が二人いたので、二か月ぶりの客だし、年寄りでもあるので見逃してくれという女主人にかまわず、二人を捕らえた。

それは確かにふたりの年寄りだった。そうでなければ、彼らだって出かけて来なかった。違っていたのはこの点だけだった。ひとり口ひげがまだらで、尖った大きな顎ひげを蓄えており、壮丁に見えると賭けをする者など誰もおらず、もうひとりはずし若く、明らかに長い間ひげを剃っていないために口ひげは黒かった。

たが、それでもやはり壮丁ではなかった。<sup>(32)</sup>

保長はどうしたものか途方にくれたが、結局、黒ひげの方のひげをきれいに剃らせて連行することに決めた。

ベッドに入っても、彼は同じ問題を気にかけていた。あのぼうぼうの鬚は悪夢のようだ。もちろん、すこしばかり金をつけてやれば、多少年寄りでも問題ない。十保じゃ、去年皆がこれではだめだと言う癩癪持ちを送り出したっけ。<sup>(33)</sup>……

割り当てられた一名の壮丁を保から出せなかった保長は、壮丁の年齢を超えている商人を拉致することと間に合わせた。この小説では、壮丁の送出に困って苦し紛れに行きずりの老人を連行する保長を描いているが、これとは反対に、徴兵命令をもらって喜ぶ保長を主人公にした作品もある。

一九四七年の短篇小説『李蝦扒』<sup>(34)</sup>では、利益を得ることを好んで手段を選ばないところから、農民に「蝦扒」<sup>(35)</sup>「蝦とり」とあだ名される保長が、詭計を弄して壮丁を連行する様を描いている。

徴兵の悪い知らせが噂から事実が変わったとき、保長蝦とりの李は本当に喜んだ。

これはいわれのないことではなかった。抗戦期間全体の中で、その大半の期間、彼はこの保の徴兵業務の責任者であって、そのうまみがどれほど大きいものかよくわかっていた！ 通りがかりの商人をひとりふたり捕まえることができれば、もちろん運がいいというものだ。運が悪く近ごろはやりの金納になったとしても、すこしのうまみもないなどということはなかった。十万でも八万でも、戸別の徴収ということになると、

やり方は彼の考えひとつなのだから。<sup>(35)</sup>

抗日戦争後には、若者が徴兵逃れのために、村を出て都会に行ったり、有力者の懐に入ったり、夜間は家にいないようにしたりしていたし、金納の額も大きくなってきて、徴兵の業務を果たすことが難しくなってきた。

そこで、保長は、一計を案じて、午後に保民会議を開くことを甲長たちに知らせるとともに、今回の徴兵には金納で対処し、金額が大きいとみなが反対するのなら、その場で辞職するつもりだと漏らしておいた。そして、保民会議の主席でもある妻の兄と示し合わせて、会議の席で、みなが金納に賛成してくれるなら、自分が立て替えておいてもよいが、反対なら辞めると発言した。妻の兄の口添えもあり、話は金納と決まって、みなはひとまず安心した。閉会まぎわに、保長は、これで問題は解決したので、若者は夜間に野宿せずともよいと欠席者にも知らせるようにさせた。

その後、保長は口実を設けては近隣の様子を探った。そして若者が戻っているのを確かめて、妻の兄と相談して、白溪口という村の康么蛮子という若者を捕縛することに決める。暴れん坊の末っ子と呼ばれているこの若者は、半月ほど野宿をしていたが、高熱が出たために家に戻ってきて休んでいたのであった。

沙汀は、このように、人びとを欺いてでも目的を果たそうとする狡猾で利己的な人物として、保長を塑像している。その意図が、国民党の行政末端に位置して人民を苦しめている悪人を指弾することにあるのはいうまでもないだろう。

作品は、逃げ場のなくなった康么蛮子が、炭焼きに用いる刀で自分の右手の食指を切り落とす場面で終わる。これでは壮丁として送り出すことができない。保長の目論見は灰燼に帰してしまったのである。この結末から

も、沙汀の意図を明らかに読み取ることができよう。

### おわりに

文学というフィルターを通して見ると、「抓壮丁」の実情が明らかになってくる。これまで見てきたように、「抓壮丁」は、いわば強制的に人びとを連行して兵士に仕立てることである。唐代にすでに行われていた徴兵の方法を、民国の軍閥混戦期から抗日戦争期、さらには国共内戦期にかけて、より強引にしてより無秩序な形で実行したものであった。

軍隊から見れば、兵士の欠員を埋めるための便法であった。軍隊内部では、戦病死や逃亡によって兵員は減少していくものであるし、そもそも本部から支給される軍費を私するために実員を定員より少なくしておくことが常態化していた。こうした状況で、一たび本部から出動命令が下されると、兵士をかき集めて間に合わせる必要が生じてくるのである。

しかし、人びとにとっては、この軍隊の便法はたいへんな災難であった。道を歩いていて拉致されたり、宿に泊っていて捕えられたりする偶然も、村の有力者の子弟の身代わりにされる必然もあって、「抓壮丁」は逃れ難い、厄介な代物であった。

四川作家は、さまざまな時期に行われた「抓壮丁」の実情を、それぞれの立場から捉えて、個性ある筆致によって叙述している。

李劫人は、軍閥混戦期の成都市街において繰りひろげられた拉致を自らの体験として述べるとともに、独特の饒舌をもって、その起こりや軍隊の事情、拉致対象に関する不文律など、「抓壮丁」の全貌を語り尽くしている。



艾蕪は、抗日戦争期において、出稼ぎの途中で拉致された農民や、地主の息子の身代わりに徴集された夫が残していった妻と子どもたちを描いて、兵士の徴発が人びとに大きな不幸をもたらすものであることを告発している。

沙汀は、国共内戦期に各地で行われた徴兵を材料として、抗日戦争を経て兵士として送り出すことのできる成年男子が少なくなっている状況で、年齢が多少高くてもともかく他所者を捕まえて送り出す保長や、徴兵の命令に金納で応じると偽って人びとを欺き、夜中に急襲して若者を連行する保長を主人公にして、保長の狡猾と幾分かの愚鈍を描いている。

このように、四川作家は、或いは軍隊の無法を指弾し、或いは農民の不幸に同情し、或いは村の有力者を揶揄しながら、読者に対して、「抓壮丁」の実情を突き付けて、それが持つさまざまな面に気づかせてくれるのである。

## 注

- (1) 仇兆鰲『杜詩詳注』巻二、中華書局、一九七九年。
- (2) 朱金城箋校『白居易集箋校』巻三、上海古籍出版社、一九八八年。
- (3) 熊子俊「拉兵記」(『龍門陣』一九八四年第一期、総第十九期、四川人民出版社)。
- (4) 原文は以下の通り。

駐眉山の新編十七師劉樹成部、就在這時奉命調往前線增援，都知道，爲了喫空，國民黨部隊的編成從不滿員，可現在是開到前方打“共產”，拿花名冊上的紙人紙馬充當砲灰能成？因此，行一路軍就得一路兵。但老百姓都“見兵如見虎”，妳還在這山，他就已經躲到那山去了，以致爛兵過處，青壯絕迹。

(5) 万金裕「抗战八年四川人民在徵兵服役上之貢獻」(中国人民政治協商會議四川省成都市委員會文史資料研究委員會編『成都文史資料選輯』總第十一輯、内部發行、一九八五年)。

(6) 原文は以下の通り。

八年抗战、四川省在各个方面都作出了巨大貢獻、其中、對於前線所需大量兵員的徵集、訓練和補充尤遠遠超過其他省份。

(7) 何応欽『八年抗战之經過』は未見。小論の記述は、賈大泉主編『四川通史』卷七(四川人民出版社、二〇一〇年)「第七章 四川对抗日战争的貢獻」および冉綿惠『民国時期四川保甲制度与基層政治』(社会科学文献出版社、二〇一〇年)「第三章 四川保甲的職能和作用」に記載された統計に拠る。

(8) 吳雪ほか集団創作『抓壮丁』(『中国新文学大系 1937-1949・戯劇卷』)、上海文芸出版社、一九九〇年)。

(9) 李劫人『危城追憶』(『李劫人全集』第七卷、四川文芸出版社、二〇一一年)。この文章は、一九三七年に、上海で刊行されていた『新中華』第五卷第一期から第六期にかけて連載された。

(10) 楊森(一八八四―一九七七)は、中華民國期の四川で勢力をふるった軍閥の一人である。北洋軍閥との関係が深く、失脚した吳佩孚を保護した。国民革命軍第二十軍軍長を経て、一九四七年には重慶市長をつとめた。

(11) 原文は以下の通り。

“不過、妳們曉得不？以前拉人當兵、只在拉人當兵、故所以拉還有個範圍：身強體壯的、下苦力的、在街上閑而無職業的、衣履不周的。後來日久弊生、拉人并不在乎當兵、而只在取財、于是乎才有了妳閣下所遇見的那些事……”

(12) 一九二六年十月に国民革命軍が武漢を占領すると、四川省の軍閥はそれぞれ国民革命軍の一軍の軍長に任じられた。すなわち、劉湘は第二十一軍、劉文輝は第二十四軍、鄧錫侯は第二十八軍、田頌堯は第二十九軍の軍長となった。

(13) 原文は以下の通り。

夥房一進門就囂囂然的說道：“二十四軍又在拉伢了！不官妳啥子人、見了就拉！長順街拉得路斷人稀、許多舖子都關了門！”

我連忙問：“人力車不是已没有了？”

“那裡還有車子的影子！拉伕是首先就拉車子，隨後才拉打空手的，今天拉得凶，連買菜的，連舖家戶的徒弟都拉！……親戚之一道……”一定是東道戰事緊急，二十四軍要開拔赴援，所以才這樣凶的拉伕。

- (14) 陳宦是袁世凱によって一九一五年八月に督理四川軍務に任じられたが、袁世凱が皇帝に即位した後、雲南省の蔡鍔が護国軍を組織したのを皮切りに、各地で反袁世凱の旗があがると、翌一九一六年五月に独立を宣言した。袁世凱は四川軍の周駿に陳宦討伐を命じ、周駿は六月に成都を攻略した（喬誠、楊續雲『劉湘』華夏出版社、一九八七年、六～八頁）。

- (15) 原文は以下の通り

北洋兵自創了這種行動，于是以後但凡軍隊開拔，伕子費是上了連長腰包，而需用的伕子便滿街拉，隨處拉。不過還有點不見明文的限制，就是穿長衫的斯文人不拉，坐轎坐車的不拉，肩挑負販的不拉，坐立在商店中的不拉，學生不拉。而且拉將去也真的是當伕子，有飯喫，到了地頭，還一定放了，讓妳自行設法回家。不過，就這樣，我一聽見拉伕，心裡老是作惡了。

- (16) 陳志讓『軍紳政權——近代中国的軍閥時期』、生活・讀書・新知三聯書店香港分店、一九七九年、第六章「士兵」。  
(17) 原文は以下の通り

一路上，許多自恃沒有被拉資格的老人們，紛紛的站在街邊議論……越來越不成話了！以前還只拉人當伕子，出夠氣力，別人還好回來，如今竟自拉人去當兵，跟他們打仗。并且不擇人，不管妳是啥子人，都拉。跑了，還誣枉妳開小差，動輒處死，有點家當的，更要弄得妳傾家破產，這是啥子世道呀！

- (18) 李劫人『失運以後的兵』（『李劫人全集』第六卷、四川文芸出版社、二〇一一年）。この小説は、一九二五年に、『醒獅』第三十一号から第三十三号にかけて連載された。

- (19) 艾蕪『意外』（『艾蕪全集』第八卷、成都時代出版社、二〇一四年）。

- (20) 原文は以下の通り。

約莫下午時分，到了一處岔路地方。那裡有着一座歇足涼亭，上面覆蓋一棵榕樹，背後流過潺潺的山泉，好多過路的人，都要在這裡歇涼，合着手板，捧起泉水來喝。老張和老李快要走到的時候，看見幾個人，坐在涼亭口上，上身都赤

裸着，手裡各捏一杆槍。老李連喊不好，老張使掉身往後逃走。但那些捏槍的漢子，眼睛更尖，立即站起來，大聲呼喊……

“不准跑，跑就開槍哪！”

(21)

原文は以下の通り。

到了晚上，他們四個挑行李的也歇在一塊，老張躺下去，有些睡不着，就小聲問……

他們糧子甚麼時候放我們？……

穿洋汗衣的夥伕不禁失笑起來。穿補疤軍衣的夥伕就說他……

“妳放心跟我們在一塊吧，不要胡思亂想了！”

老李担心地問……

“他們老總不放我們走麼？”

穿洋汗衣的就責備說……

“妳們好蠢！這光景都看不出來麼？豈只叫妳們挑東西，還要叫妳們摸槍杆子哪！”

(22)

原文は以下の通り。

到半夜的時候，老張把老李輕輕推醒，小聲地說……

“我困不着覺，我心裡亂得很！明天，我要回去。”

老李尖起耳朵，聽一聽身邊睡的兩個夥伕都在打鼾聲，然後才向老張說……

“妳把錢給他們，妳拿甚麼還帳呢？”

老張深深嘆一口氣。老李就勸他……

“算了吧，村子上還不是要抽着妳？”

老張想了一會說……

“他們不是說，獨子可以免抽麼？我們兩個又都是獨子！”

老李搖一搖頭說……

“那信不得的，唐村長他們甚麼做不出來！喊聲他要抽妳，妳有甚麼法子不服他！就好比今天的事情，上頭不是出過

告示麼？他還不是抓妳走就走！

老張難過地閉着了眼睛。

(23) 艾蕪『荒地』、『艾蕪全集』第八卷，成都時代出版社，二〇一四年。

(24) 王金裕『抗戰八年四川人民在徵兵服役上之貢獻』（中國人民政治協商會議四川省成都市委員會文史資料研究委員會編『成都文史資料選輯』總第十一輯，內部發行，一九八五年）。

(25) 何応欽『八年抗戰之經過』。冉綿惠『民國時期四川保甲制度与基層政治』（社会科学文献出版社，二〇一〇年）「第三章 四川保甲的職能和作用」に記載された統計に拠る。

(26) 冉綿惠『民国時期四川保甲制度与基層政治』，社会科学文献出版社，二〇一〇年，第三章 四川保甲的職能和作用。

(27) 笹川裕史『糧食・兵士の戰時徵発と農村の社会変容——四川省の事例を中心に』（石島紀之・久保享編『重慶国民政府史の研究』東京大学出版会，二〇〇四年）。

(28) 沙汀『煩惱』（『沙汀文集』第四卷，上海文芸出版社，一九八八年）。

(29) 原文は以下の通り。

自從父親前幾天向他提示，內戰打起來了，又要抓壯丁了，而如果再認真抓起丁來，他得重新請求鄉長保險以後，他就感覺得七上八下，心裡老不自在。

(30) 沙汀『替身』（『沙汀文集』第三卷，上海文芸出版社，一九八七年）。

(31) 原文は以下の通り。

他還缺一名丁，這數目不算大。因為按照本保適齡壯丁的比數，就是多抽一個也容易的……可惜沒有一個人他好下手！他們不是他的親戚，就是他的親戚的親戚，有的還同那些地位比他高得多的人有瓜葛，而這種種不可避免的人事關係，看來就象一張網樣，他已經在裡面胡碰了好多次了，終於找不到出路！買條子自然是個辦法，簡潔明瞭，付過款就作數……只是數目既大，又要現款，派起來不容易。說到估拉過往客商，本保正當山河大道，這個并不困難。然而，自從陰曆二月初起，所有的挑担賣買，又幾乎絕迹了。

(32) 原文は以下の通り。

那確乎是兩個老頭子，不然，他們也不敢上路的。不同的只有這點，一個鬍子花白，蓄着大牛角鬚，無人敢于打賭說他象個壯丁；另一個要年輕些，鬍子純黑，顯然由于長久沒有刮臉，但也一樣不是壯丁！

(33) 原文は次の通り。

睡在床上，他也挂念着這同一問題，彷彿那部亂蓬蓬的鬍子是個惡夢。自然，只須多花點點送費，老一點也不妨的，十保去年就曾經送掉一個誰都搖頭的氣包。……

(34) 沙汀『李蝦扒』（『沙汀文集』第四卷，上海文芸出版社，一九八八年）。

(35) 原文は以下の通り。

當兵這個噩耗，由傳聞變成事實的時候，保長李蝦扒着實樂了一通。

這不是沒有來由的，整個抗戰期中，有大大半時間，他都負責主持本保的徵兵業務，深知其間的油水有多麼大！能夠抓一兩個過往客商，自然算頂運氣，即或倒霉到一向流行的買條子，他又何嘗沒有一點好處？因為不管十萬八萬，一到挨戶攤派，把戲可就由他耍了。

---

## The Abduction by the Forces in Sichuan Literature

Hiroshi NAKA

### Abstract

In the first half of twentieth century, the abduction by the forces was rampant among Sichuan province. In that period, there were many military cliques in Sichuan province, and they frequently battled with each other. Thereafter, the military cliques sent troops to fight with the Japanese army, and after that, they also fought with the Communist army. Under these circumstances, they needed many soldiers and led the men who happened to pass by or happened to put up at inn away to the unit.

Sichuan writers realized these abductions by the forces in their works, because Sichuan is the province that sent most soldiers in the front in that period. Li Jieren gave a vivid description of the abduction at the streets in Chengdu and accused the forces severely. Ai Wu described the farmers who distressed with the abduction by the forces and showed sincere compassion for them. Sha Ting chose chiefs of villages who carried out picking the men in their villages up for taking them away to the unit and satirized their tricky act and stupidity.

Sichuan writers, thus, from their own standpoint, narrated the abduction by the forces and showed their readers the actual state of the abduction.